

『元朝秘史』と『華夷訳語』における漢字使用の問題

栗林 均 (日本・東北大学)

Hitoshi Kuribayashi (Tohoku Univ., Japan)

1. 『元朝秘史』と『華夷訳語』

『元朝秘史』と『華夷訳語』は、ともに14世紀の後半に漢字によってモンゴル語を表記した資料であり、モンゴル語を表記する方式は極めて類似している。

ここでいう『華夷訳語』は、洪武二十二年(1389年)の序をもつ漢蒙対訳語彙および文例集である。対訳語彙の部分は28丁で、天文、地理、時令、花木等々17の部門に分類された845の漢語の語彙に対して、漢字で表記されたモンゴル語の単語が付されている。文例集には、詔勅5件(28丁)と上奏文7件(24丁)が収められている。ここでは、文例集の前半(詔勅5件)を第1部、後半(上奏文7件)を第2部と呼ぶ。

文例の第1部では、漢字で音写したモンゴル語の文の傍らに単語・語尾ごとに漢語の逐語訳(傍訳)が付され、各文のあとに漢文による訳文(意訳)を付している。これは、『元朝秘史』におけるモンゴル語の「音訳」、単語や語尾の脇に付された逐語的な「傍訳」、段落ごとの漢文訳である「意訳」とまったく同じ構成である。文例集の第2部では、モンゴル語の漢字音訳と傍訳は第1部と同様であるが、文や段落の漢文訳(意訳)は付されていない。

『元朝秘史』と『華夷訳語』は、漢字でモンゴル語を表記する方式が極めて類似していることは上に述べたとおりであるが、両者の間には使用する漢字の種類や使用の仕方について少なからぬ相違が見出されることもまた事実である。陳垣氏は、1934年に出版された『元秘史譯音用字攷』（民國23年）において、『元朝秘史』と『華夷訳語』の音訳方式の相違点を詳細に調査した結果を整理して提示し、それに基づいて両者の成立の先後の関係を論じた。これは『元朝秘史』と『華夷訳語』の音訳方式の特徴について確かな基礎を提供し、その後の研究の出発点となった。これを受けて、この分野の研究を進め、少なからぬ貢献を果たしたのは日本の研究者たちであった。これに関して発表された亜主要な著作や論文を次に挙げる：

服部四郎『元朝秘史の蒙古語を表はす漢字の研究』文求堂、1946年。

山崎忠「甲種本華夷譯語の音訳漢字の研究—語彙の部—」『天理大学学報』第3巻第1号（第5輯）1951年、55-80頁。

山崎忠「いわゆる甲種本華夷譯語の音譯漢字の研究—文例の部—」ユーラシア學會研究報告『遊牧民の社會と文化』1952年、87-111頁。

小林高四郎『元朝秘史の研究』日本學術振興會、1954年。

村山七郎「元朝秘史音譯成立年代の問題に寄せて」ユーラシア學會（編）『内陸アジアの研究』1955年、107-121頁。

村山七郎「華夷譯語と元朝秘史との成立の先後に關する問題の解決」『東方學』22、1961年、115-130頁。

小澤重男『元朝秘史』岩波新書、1994年。

栗林均「『元朝秘史』と『華夷訳語』における与位格接尾辞の書き分け規則について」日本言語学会『言語研究』第121号、2002年、1-18頁。

ここでは、これまでの研究をふまえて、『元朝秘史』と『華夷訳語』においてモンゴル語を表記する漢字の使い方について、主要な相違点をまとめてみたい。

使用する資料としては、『元朝秘史』は四部叢刊本（第三集所収）を、『華夷訳語』は『涵芬樓秘笈』第4集所収のものによる。

出現箇所は『華夷訳語』の場合、0:対訳語彙集、1:文例集第1部、2:文例集第2部として、それぞれの丁数(01~28)、表(a)裏(b)、行数を示す。たとえば、0:02a8とあるのは、0:対訳語彙集の第2丁表の第8行を表す。

『元朝秘史』における出現位置は、巻数、丁、行数をコロンで区切った2桁ずつの数字で示す。たとえば、01:31:05は第1巻の第31丁の第5行を表す。例は、「出現位置」「漢語訳」「漢字音訳モンゴル語」「ローマ字転写形」の順序で掲げる。

2. 小字「丁」の使用

『華夷訳語』では、モンゴル語の音節末の子音1を表記するのに次のような3つのやり方が取られている。

(1) 漢字「里」「魯」（および「刺」「列」「羅」）を用いる。

0:02a8 浪 多里吉顔 (dol<i>giyan)

- 0:05a8 驢 額里只干 (el<i>jigen)
 0:06b6 螢 中合里秃^中豁羅孩 (qal<i>tu qoloqai)
 0:10a1 頭盔 都兀魯^中合 (du'ul<u>qa)
 1:06a3 做 孛魯^中忽 (bol<u>=qu) etc.

上の例では、「里」「魯」が音節末の l を表すのに用いられている。

(2) 漢字の左脇に小字「丁」の字を付す。

- 0:08a6 鬚 丁迭 (del)
 0:14b1 奴婢 孛丁斡 (bo'ol)
 2:06a2 差發行 丁阿斑泥 (alban-ni)
 0:06b5 蠅 石模丁温 (šimu'ul)
 0:03a3 冬 兀丁奔 (übül)
 0:11b5 衣 迭丁延 (de'el) etc.

「丁迭」「丁斡」「丁阿」では、「迭 (de)」「斡 (o)」「阿 (a)」という母音で終わる漢字に小字「丁」を付して、それぞれ del, ol, al という音節を表している。

一方「丁温」「丁奔」「丁延」では、「温 (un)」「奔 (bün)」「延 (en)」という子音 n で終わる漢字に小字「丁」を付して、それぞれ ul, bül, el という音節を表している。

(3) 漢字の右脇に小字「勒」の字を付す。

- 0:01a7 冰 莫^勒孫 (mölsön)
 0:02a1 潭 扯額^勒 (če'el)
 0:11b2 火 中合^勒 (qal)
 0:21b4 光 格^丁連^勒 (gerel)

0:23b1 髯 撒罕_勒 (saqal)

0:27a8 方 朶兒邊_勒真 (dörbeljin) etc.

「莫_勒」「額_勒」「中合_勒」では、「莫 (mö)」「額 (e)」「中合 (qa)」という母音で終わる漢字に小字「丁」を付して、それぞれ möl, el, qal という音節を表している。

これに対して、「舌連_勒」「罕_勒」「邊_勒」では、「舌連 (ren)」「罕 (qan)」「邊 (ben)」という子音 n で終わる漢字に小字「丁」を付して、それぞれ rel, qal, bel という音節を表している。

『元朝秘史』では、これらのうち、もっぱら(3)の小字「勒」の字を付す方式が用いられている。(1)の方式は少数であるが、『元朝秘史』にも見られるが、(2)の小字「丁」は1回も現れない。例：

02:18:10 火有的 中合_勒禿 (qaltu)

04:03:02 鬚 迭_勒 (del)

04:22:04 奴婢 孛斡_勒 (bo'ol)

07:11:06 做 孛_勒忽 (bol=qu) etc.

05:12:04 冬 兀不_勒 (übül)

04:39:07 衣 迭額_勒 (de'el) etc.

このように、音節末の子音 l を表記するために小字「丁」を使用するのは『華夷訳語』に独自の特徴である。

	『華夷訳語』	『元朝秘史』
小字「丁」	使用する	使用しない

小字「丁」の使用の問題も含めて、『華夷訳語』において、音節

末の子音 1 を含む音節がどのように漢字表記されているか、またそれらが『元朝秘史』ではどのような表記に対応しているかは、より複雑で興味深い問題が含まれているが、ここでは最も目立った外見上の相違点を指摘しておくに留める。

3. 副動詞語尾の書き分け

『元朝秘史』では、モンゴル語の動詞副動詞形の活用語尾として、語幹が子音 b, k, q, r, s, t に終わる場合には「抽 (=čü/=čü)」という語尾がつき、それ以外の場合には「周 (=ju/=jü)」という語尾が用いられている。『華夷訳語』では、こうした書き分けは行われず、接尾辞はすべて「周 (=ju/=jü)」で統一されている。子音 b, k, q, r, s, t に終わる語幹に対して、「周 (=ju/=jü)」は 14 回現れ、「抽 (=čü/=čü)」が使われている場合が 1 回だけある。

『華夷訳語』の例：

- 2:12a1 要着 阿卜周 (ab=ju)
 1:20b1 與着 斡_克周 (ök=jü)
 1:27a2 到着 古児周 (gür=jü)
 1:10a2 穿着 額木思周 (emüs=jü)
 1:21b2 去着 斡_楊周 (ot=ju)

『元朝秘史』の例：

- 01:08:08 要着 阿卜抽 (ab=čü)
 01:47:03 與着 斡_克抽 (ök=čü)
 02:39:07 到着 古児抽 (gür=čü)
 07:37:09 穿着 額木思抽 (emüs=čü)

03:09:03 去着 幹_楊抽 (ot=ču)

『元朝秘史』においても、子音 b, k, q, r, s, t に終わる語幹に対して、「周 (=ju/=jü)」が用いられている例は第1巻に4例、第2・4・6巻に1回ずつ、合計6回あるが、「抽 (=ču/=čü)」が用いられている回数と比べて極めて少数であり、例外的な表れとみなしうる。

子音 b, k, r, s, t に終わる語幹に対して、「抽 (=ču/=čü)」が用いられている回数は次のとおりである：第1巻30回、第2巻45回、第3巻21回、第4巻35回、第5巻36回、第6巻37回、第7巻24回、第8巻24回、第9巻14回、第10巻30回、第11巻40回、第12巻15回。

語幹末音	『華夷譯語』	『元朝秘史』
子音 b, k, q, r, s, t	周 (=ju/=jü)	抽 (=ču/=čü)
上記以外の子音、母音		周 (=ju/=jü)

これと同じことは、動詞の過去時制語尾のひとつである「主兀・周兀 (=ju'u/=jü'ü)」と「出兀 (=ču'u/=čü'ü)、また「主為・周為 (=ju'ui/=jü'üi)」と「出為 (=ču'ui/=čü'üi)」のについてもあてはまる。

語幹末音	『華夷譯語』	『元朝秘史』
子音 b, k, q, r, s, t	主兀・周兀 (=ju'u/=jü'ü)	出兀 (=ču'u/=čü'ü)
上記以外の子音、母音		主兀 (=ju'u/=jü'ü)

『華夷訳語』の例：

1:24b5 名字號了 捏^舌列亦^楊周兀 (nereyit=jü'u)

1:26b5 去 幹^楊周兀 (ot=jü'u)

『元朝秘史』の例：

05:39:07 落後了有來 豁^中綽^舌兒出兀 (qočor=ču'u)

05:44:05 出去了 合^中舌兒出兀 (qar=ču'u)

06:03:02 問有來 阿撒^黑出兀 (asaq=ču'u)

08:04:08 起有 孛思出兀 (bos=ču'u)

4. 動詞の過去時制接尾辞の表記

『華夷訳語』と『元朝秘史』では、モンゴル語の動詞活用の中に、過去時制を表す男性形の=ba/=be、女性形の=bi、複数形のが用いられている。これらの接尾辞は、『華夷訳語』においては次のような漢字で表記されている。

男性形 =ba/=be : 「八」「巴」「別」

女性形 =bi : 「畢」

複数形 =bai/=bei : 「伯」

これに対して、『元朝秘史』では男性形の=ba/=beを表す漢字として、『華夷訳語』では使われていない「罷」という漢字が多用されているのが特徴である。このほか、『元朝秘史』では第1・2巻と第3～12巻との間で、極めて顕著な表記上の違いが認められる。

『元朝秘史』の第3巻以降では、「罷」の直後に小さい字で「^{原作}八」「^{原作}巴」「^{原作}別」といった注記が付されているものがあり、これは第1・2巻には見られない表記である。(厳密に言えば、第2巻の

第1節と第2節に限ってこの表記が認められる。)つまり、第3巻以降では過去時制の接尾辞として、「罷」と並んで「罷^{原作}_八」「罷^{原作}_巴」「罷^{原作}_別」「罷^{原作}_伯」^{原作}という音訳形が用いられているのが大きな特徴である。このように、第3巻以降に見られる「罷^{原作}_八」「罷^{原作}_巴」「罷^{原作}_別」「罷^{原作}_伯」^{原作}という表記は、元来「八」「巴」「別」「伯」と書かれていたことを示していることは言うまでもない。

第1巻と第2巻には、『華夷譯語』で用いられている音訳形のうち、「八」と「伯」は1回も現れず、「巴」と「別」はそれぞれ6回用いられているに過ぎない。これは、第1巻と第2巻において、元来は『華夷譯語』と同じように「八」「巴」「別」「伯」と表記されていたものを、すべて「罷」に書き換えて統一した際に、上の「巴」と「別」は書き換えから漏れてしまったものと考えられる。

なお、上で言及したように、第2巻では、最初の第1節 (§69)と第2節 (§70)だけ第3巻以降と同様の表記が行われている。これは、『元朝秘史』の第1・2巻と第3～12巻が別に製作された後、この部分(第2巻の第1・2節)だけ、第3巻以降の音訳方式によって書き換えられ、差し替えられたことを推定させる。

	『華夷 譯語』	『元朝秘史』			
		第 1 巻	第2巻		第3～12巻
			第3節以降	第1・2節	
=ba/ =be	八	罷 ^{原作} _八		(1回)	
		罷			

	巴	巴 (6回)	罷 ^{原作} _巴 (2回)
	別	別 (6回)	罷 ^{原作} _別
=bai/ =bei	伯		罷 ^{原作} _伯

『華夷訳語』の例：

- 2:21a2 殺了 阿刺八 (ala=ba)
 1:12a4 與了 幹_克八 (ök=be)
 1:20b2 了也 孛魯巴 (bol<u>=ba)
 2:21a2 来了 亦_舌列別 (ire=be)
 1:03b4 住 阿伯 (a=bai)
 2:04b4 寫了 必赤伯 (biči=bei)

『元朝秘史』第1・2卷の例：

- 01:21:03 作聲 多汪_中豁_陽巴 (dongqot=ba)
 01:32:05 有来 阿巴 (a=ba)
 02:21:02 被見来 兀者_克迭別 (üjekde=be)
 01:03:08 上去了 _中合兒罷 (qar=ba)
 01:11:10 與了 幹_克罷 (ök=be)

『元朝秘史』第3~12卷、第2卷第1・2節の例：

- 10:14:07 教入了 幹_舌羅兀_勑罷^{原作}_八 (oro'ul=ba)
 03:44:05 教做了 孛_[勑]合罷^{原作}_巴 (bo[l]qa=ba)
 04:03:08 被殺了 阿刺_[黑]荅罷^{原作}_巴 (ala[q]da=ba)
 02:01:06 来了 亦_舌列罷^{原作}_別 (ire=be)
 04:09:09 說了 客額罷^{原作}_別 (ke'e=be)
 07:01:08 與了 幹_克罷^{原作}_別 (ök=be)

- 04:06:04 来了 亦^舌列罷^{原作}_俗 (ire=be)
 10:33:03 做了 孛^舌罷^{原作}_俗 (bol=ba)
 06:23:09 殺了 阿刺罷 (ala=ba)

5. 音節末の r 音の表記

モンゴル語の音節末の子音 r を表すのに、『華夷訳語』と『元朝秘史』の第1・2巻では「児」の漢字を用いているのに対して、『元朝秘史』の第3巻以降では「児」の右脇に小字「舌」を付した「^舌児」の字を用いている。(『華夷訳語』に1例だけ「^舌児」の字を用いた例がある。) 興味深いことに、第1巻の第1節 (§69) と第2節 (§70) は、過去時制の接尾辞の場合と同様、「^舌児」と表記されており、この部分だけ第3巻以降の表記方法と同じである。

	『華夷 訳語』	『元朝秘史』			
		第 1 巻	第2巻		第3~12巻
			第3節 以降	第1・2節	
音節末の r 音		児	^舌 児		

『華夷訳語』および『元朝秘史』第1・2巻の例：

- | | |
|-----------------------|----------------------------|
| 0:02b2 野 客額児 (ke'er) | 秘史 01:37:04 野 客額児 (ke'er) |
| 0:09a1 房子 格児 (ger) | 秘史 02:22:04 家 格児 (ger) |
| 0:14b1 百姓 亦児堅 (irgen) | 秘史 01:18:03 百姓 亦児堅 (irgen) |
| 0:26b1 疾 斡帖児 (öter) | 秘史 02:42:07 疾快 斡帖児 (öter) |

1:20a5 四 朶兒邊 (dörben) 秘史 02:07:07 四 朶兒邊 (dörben)

『元朝秘史』第 3~12 卷、第 2 卷第 1・2 節の例：

07:38:04 曠野 客額^𑖀兒 (ke'er)

02:01:08 春 𑖀合不^𑖀兒 (qabur)

10:05:07 房子 格^𑖀兒 (ger)

12:18:01 百姓 亦^𑖀兒堅 (irgen)

05:04:06 快 翰帖^𑖀兒 (öter)

10:37:05 四 朶兒邊 (dörben)

6. 与位格接尾辞の書き分け

『華夷訳語』と『元朝秘史』で与位格を表す接尾辞としては「突兒 (-dur/-dür)」「途兒 (-tur/-tür)」「圖兒 (-tur/-tür)」という 3 種類の音訳形が用いられている。これらの音訳形は、『元朝秘史』の第 1・2 卷と第 3~12 卷では、まったく違った原理によって書き分けられている。そして、『華夷訳語』の書き分け規則は、『元朝秘史』第 1・2 卷の方式と合致している。

『華夷訳語』および『元朝秘史』において、-dur/-dür, -tur/-tür というモンゴル語の与位格接尾辞に対して、「時」「時分」「行」「裏」という漢語の傍訳が付されている。「時」と「時分」は同じものとして、これらは次の 3 つの意味を表している。

- A. 「時」「時分」――「～する時、～した時」(動作の行われる時点)
- B. 「行」――「～へ、～に」(動作の向かう対象)
- C. 「裏」――「～で、～に」(動作の行われる位置)

『華夷訳語』および『元朝秘史』第 1・2 卷では、漢語の傍訳が「時」

「時分」のときには「突兒」という音訳形が用いられ、傍訳が「行」のときには「途兒」が、傍訳が「裏」のときには「圖兒」が用いられており、これらの対応は一貫している。

これに対して、『元朝秘史』の第3～12巻では、与位格の接尾辞が接尾する語幹末音の種類によって書き分けが行われている。つまり、

- 1) 語幹が母音、二重母音、子音 n, ng, l, m で終わる場合には「突^兒」という音訳形が用いられ、
- 2) 語幹が子音 b, k, q, r, s, t で終わる場合には「途^兒」「圖^兒」が用いられている。「途^兒」と「圖^兒」についてさらに詳しく検討すると、若干の例外はみられるものの、「途^兒」は傍訳「行」に対応しており、「圖^兒」は傍訳「裏」に対応して書かれていることを確認することができる。

与位格 接尾辞	『華夷 訳語』	『元朝 秘史』 第1・2巻	与位格 接尾辞	『元朝秘史』 第3～12巻	
突兒	傍訳「時」「時分」に 対応		突 ^兒	母音、二重母音、子音 n, ng, l, m で終わる語幹に	
途兒	傍訳「行」に対応		途 ^兒	子音 b, k, q, r, s, t	傍訳「行」に 対応
圖兒	傍訳「裏」に対応		圖 ^兒	で終わる 語幹に	傍訳「裏」に 対応

『華夷訳語』および『元朝秘史』第1・2巻の例：

A. 傍訳「時」「時分」と「突児」の対応

- 1:05a4 入了時 斡羅_黑三突児 (oro=qsan-dur)
 1:10b3 今時 額朶額突児 (edö'e-dür)
 01:33:02 去的時 斡_楊中灰突児 (ot=qui-dur)
 02:27:04 住時 阿恢突児 (a=kui-dur)

B. 傍訳「行」と「途児」の対応

- 1:15a4 孫行 哈赤納児途児 (haçi+nar-tur)
 1:22b1 多行 斡欒途児 (olon-tur)
 01:17:07 百姓行 亦児堅途児 (irgen-tür)
 02:11:05 崖子行 中合蒼途児 (qada-tur)

C. 傍訳「裏」と「圖児」の対応

- 1:19b2 手裏 中合児圖児 (qar-tur)
 1:08a3 國裏 兀魯思圖児 (ulus-tur)
 01:35:06 性命裏 阿民圖児 (amin-tur)
 02:28:10 馬群裏 阿都温圖児 (adu'un-tur)

『元朝秘史』第3～12卷の例：

1) 語斡が母音、二重母音、子音 n, ng, l, m で終わる場合

- 03:50:03 皇帝行 中罕突_舌児 (qan-dur)
 04:19:07 敵行 歹亦孫突_舌児 (daiyisun-dur)
 04:49:06 言語裏 兀格突_舌児 (üge-dür)
 07:12:04 達達行 忙_中豁_楊突_舌児 (mongqol-dur)
 11:26:10 肩行 額甘突_舌児 (egem-dür)
 11:31:06 青草裏 斡郎突_舌児 (öleŋg-dür)
 11:26:01 額行 莽來突_舌児 (manglai-dur)

2) 語幹が子音 b, k, q, r, s, t で終わる場合

09:37:01 班裏 客失_克圖_舌兒 (kešik-tür)

09:23:02 時裏 察_黑圖_舌兒 (čaq-tur)

04:17:01 營盤裏 嫩禿_黑圖_舌兒 (nuntaq-tur)

05:18:02 國裏 兀魯思圖_舌兒 (ulus-tur)

04:31:07 兩箇行 中豁牙_舌兒途_舌兒 (qoyar-tur)

07:47:07 軍每行 扯_舌里兀_楊途_舌兒 (čeri'üt-tür)

11:02:08 城行 巴刺_{中合}楊途_舌兒 (balaqat-tur)

ABSTRACT

『元朝秘史』와 『華夷訳語』의 한자 사용의 문제

쿠리바야시 히토시(栗林 均) (東北大学教授)

1. 『元朝秘史』와 『華夷訳語』

『元朝秘史』와 『華夷訳語』는, 두 문헌 다 14세기 후반의 한자로 몽골어를 표기한 자료이고 몽골어를 표기한 방법도 상당히 유사하다.

여기서 말하는 『華夷訳語』는 洪武二十二年(1389年)의 漢蒙対訳語彙 및 文例集이다.

対訳語彙의 부분은 28丁으로 天文、地理、時令、花木 등의 17개 부분으로 분류된 845 漢語語彙에 대해, 한자로 표기된 몽골어의 단어가 붙여져 있다. 文例集에는 詔勅 5件(28丁)과 上奏文 7件(24丁)이 수록되어 있다. 여기서는 文例集의 전반(詔勅 5件)을 第1部、후반(上奏文 7件)을 第2部로 칭한다.

文例의 第1部에는, 漢字로 音写된 몽골어문 옆에 단어, 어미마다 漢語의 傍訳이 붙여져, 각 文의 뒤에 漢文으로 訳文(意訳)을 첨부하고 있다. 이것은 『元朝秘史』의 몽골문의 「音訳」、単語나 語尾 옆에 붙여진 「傍訳」、段落마다의 漢文訳인 「意訳」과 완전히 같은 구성이다. 文例集의 第2部는, 몽골어의 漢字音訳과

傍訳은 第1部와 같지만 文이나 段落의 漢文訳 (意訳) 은 붙여져 있지 않다.

『元朝秘史』와 『華夷訳語』은、漢字로 몽골어를 표기하는 방식이 극히 유사하다는 것은 위에서 언급한 대로이지만 두 문헌 사이에는 사용하는 한자의 종류나 사용방법에 있어서는 조금이나마 相違点이 보여지는 것 또한 사실이다. 陳垣氏는 1934 年에 출판된 『元秘史譯音用字攷』에서 『元朝秘史』와 『華夷訳語』의 音訳方式의 相違点을 상세히 조사한 결과를 정리하여 제시하고, 그것을 바탕으로 두 문헌의 성립의 전후 관계를 논했다. 이것은 『元朝秘史』과 『華夷訳語』의 音訳方式의 특징에 관해 확실한 기초를 제공했고 그 이후의 연구들의 출발점이 되었다.

여기에서는、지금까지의 연구를 기초로 해서 『元朝秘史』와 『華夷訳語』의 몽골어를 표기한 한자의 사용방법에 관해 중요한 相違点을 정리해 보겠다.

2. 小字「丁」의 使用

	『華夷訳語』	『元朝秘史』
小字「丁」	사용함	사용하지 않음

3. 副動詞語尾의 구별해 쓰기

	『華夷訳語』	『元朝秘史』
語幹末音		
子音 b, k, q, r, s, t	周 (=ju/=jü)	抽 (=čü/=čü)
記以外의子音、母音	周 (=ju/=jü)	周 (=ju/=jü)

4. 動詞의 過去時制接尾辭의 表記

	『華夷 訳語』	『元朝秘史』			
		第 1 卷	第 2 卷		第 3~ 12 卷
			第 3 節 以降	第 1·2 節	
-ba/-be	八	/		罷 ^{原作} _八 (1 回)	
		罷			
	巴	巴 (6 回)		罷 ^{原作} _巴 (2 回)	
	別	別 (6 回)		罷 ^{原作} _別	
-bai/-bei	伯	/		罷 ^{原作} _伯	

5. 音節末의 r 音의 表記

	『華夷 訳語』	『元朝秘史』			
		第 1 卷	第 2 卷		第 3~ 12 卷
			第 3 節以降	第 1·2 節	
音節末의 r 音		兒		舌兒	

6. 与位格接尾辭의 구별해 쓰기

与位 格 接尾 辭	『華夷訳語』	『元朝秘史』 第1·2卷	与位 格 接尾 辭	『元朝秘史』 第3~12卷
--------------------	--------	-----------------	--------------------	------------------

突兒	傍訳「時」「時分」에 対応	突 ^舌 兒	母音、二重母音、子音 n, ng, l, m 로 끝나는 어간에	
途兒	傍訳「行」에 対応	途 ^舌 兒	子音 b, k, q, r, s, t 로	傍訳「行」에 対応
圖兒	傍訳「裏」에 対応	圖 ^舌 兒	끝나는 어간에	傍訳「裏」에 対応